

## 十八世紀前半の理性

ブローレ・デランド『批判的哲学史』をめぐって

寺 田 元 一

本稿の課題は、近代理性の現代的可能性の問題を遠望しつつ十八世紀前半の啓蒙の理性の一端をブローレ・デランド（以下、デランド<sup>(1)</sup>）の『批判的哲学史』（以下、『哲学史』<sup>(2)</sup>）を中心に説明することにある。

啓蒙の理性とは何か。この問いに対しては「啓蒙とは、人間が自己の未成年状態を脱却することである<sup>(3)</sup>」という、カントの有名な一節があり、そこで彼は、タブー視されてきた啓示や神的ロゴス、伝統に対して勇氣を持って人間理性を対峙させていくことを要請している。このように、啓蒙の理性は、一方で、自由な批判検討の精神であるが、同時に、それは次のようなより具体的な自己規定を持つと思われる……：神的ロゴスを排除するがゆえに自

己ならびに他者の視野、尺度の限界・相対性を意識していること、近代科学の方法——実験観察、分析など——を重視し経験的なものとの結合を求め、それを通じて自然、人間、社会の必要な認識が得られると考えること、獲得された認識の応用とその際の集団的な協働によって、自己の相対性・限界を現世的、社会的に克服し徳や幸福を実現できると考えること。以上の諸規定相互間の関係を詳論する余裕はないが、啓蒙の理性の全体像は当面必要な限りで示され得たと考える。

それでは、十八世紀前半の啓蒙の理性とは何であろうか。啓蒙の理性全般についての上述の規定が十八世紀後半においてこそ十全に適合するものであることは言うま

でもない。この規定によって世紀前半の理性を測れば、それを単に後半期の理性の先駆者や準備者にしかねない。そのことを避けるために、理性についてより広いパースペクティブを保ちつつ、次に、十八世紀前半の理性を固有に規定し、それが後半期の理性に対して持つ種差にも簡単に触れることにしよう。

十八世紀前半の理性については既に古典的となったD・モルネ『フランス革命の知的起源』(一九三三年)、P・アザール『ヨーロッパ精神の危機』(一九三五年)などの研究がある。<sup>(4)</sup> こうした研究を参考にして、まず、世紀前半の理性を一般的に特徴付けることにしよう。それには次のような性格がある、1. 支配的位置を占める「明証の原理に基づいて決定をし、伝統とか権威によらない」「デカルト的な理性」<sup>(5)</sup>、「無数の誤謬をぶちこわす」<sup>(6)</sup>「攻撃的な理性」、2. 力を弱めつつも影響力を存続していた考証学的博識のユマニスト的理性<sup>(7)</sup>、3. ベーコン、ロック、ニュートンなどの名と結びついた新興の反形而上学的で実験科学的かつ経験的理性、あるいは、「人間精神のバネをしらべ、善悪を判定したり断罪したりするのではなく、ただ観察し理解する」<sup>(8)</sup>理性。

これらの内では1が中心であり2は衰退していき3はその後更に影響力を増していくと言える。つまり、〈博な知識〉↓〈厳密な思考〉↓〈実験的批判的精神〉という移行が十七世紀から十八世紀にかけてなされたが、その過程の半ばにあって三者が対立しつつ並存しているのである。そこから、〈啓蒙の理性〉としてまとめた理性と〈十八世紀前半の理性〉との間には次のような種差が生じる。すなわち、前者は、近代科学の方法を中核とし批判と建設とを結合させた統一の進取的相貌を持つものに対し、後者は、「善悪を判断したり断罪したりする」

〈デカルト的理性〉と「ただ観察し理解する」〈実験科学的理性〉との矛盾を中心に三理性間の矛盾を内包しており、また、新しい科学、イデオロギー、社会の建設に向かう傾向も持ちながら、それよりもむしろ、過去との関係で自己のアイデンティティを定めようとする傾向をより強く持っている、歴史、伝統、習慣などを、一方では、模倣、崇拜し、他方では、批判、攻撃しながらも。

本稿では、いま略述した枠組みを準拠枠としてデランドの理性を説明することにするが、仮にそれを直接尺度として利用すれば、評価が外的になされ兼ねないであろう

う。後に示すように、われわれは、『哲学史』に内在しそこから尺度を引き出してデランドの理性を規定する方向を取り、その上で、われわれの分析の成果を準拠枠との関連で位置づけるつもりである。こうした方法により、デランドの理性が十八世紀前半において占める位置を、単に一般的なレベルに留まらず、その個性に至るまで追求しうると期待できるからである。

デランドは東インド会社で中心的役割を演じていたブルジョアでその後新興貴族となった家庭に生まれた。彼自身海軍主計官を長年務めて東インド会社を中心とするフランスの通商の発展に尽力している。また、『自然学自然誌論集』(初版一七三六年)を出版するなど、パリ科学アカデミーを中心に科学活動も行っている。彼はまたデカルトの影響を受けた自由思想家でもあり、『冗談をいって死んでいった偉人の考察』(一七二二年)を書いている。このようにデランドは合理的かつ批判的精神を持って、政治、経済、科学、思想の諸分野で活躍した人物である。

デランドについては既にいくつかの研究がなされてい

る。ジャック・ブルーストは彼を百科全書的精神の先駆者として高く評価している。ブルーストによれば、「ルネサンスから『百科全書』に至る思想の二つの流れ」(すなわち、「人間精神と啓蒙の批判的歴史」の流れと、「自然資源と人間がなし得る資源の利用との批判的調査・検討」の流れ、この二潮流は『百科全書』において合流し統一される)がデランドにおいて並存するまでに至っているのである。<sup>(9)</sup> ジャン・マカリはブルーストの着眼を継承して『十八世紀の仮面と光明』(一九七五年)なるデランド研究書を發表した。<sup>(10)</sup> しかし、ブルーストと異なりマカリでは『百科全書』とデランドとの距離が事実上無に等しくなってしまう。デランドは後のフィロゾーフ、ラ・メトリーやデイドロに直結する唯物論者に祭り上げられる。ブルーストとマカリの二人とは独立に東ドイツの研究者ロルフ・ガイスラーも『ブロー||デランド初期啓蒙の一唯物論者』(一九六七年)という研究を發表している。彼はマルクス主義的な思想史研究の伝統に立って知られざる唯物論者の発掘という観点からこの作業を行った。『哲学史』の与えた影響の実証的分析などこの研究には学ぶべき点が多いが、マカリ同様デラン

ド評価が後のフィロゾーフや唯物論者との連続性に傾き過ぎて<sup>(1)</sup>いる。

以上のように、ブルーストは措くとしても、デラランドについて書かれた主要な二つのモノグラフがともにデラランドを後の唯物論者という鏡に映し出して両者の同一性を確認し、彼をフィロゾーフの先駆者とすることに偏しており、デラランド思想の実像を見失っているように思われる。われわれは、彼の理性観をめぐってその歴史的制約と同時に歴史的意義・役割を説明する方向で分析を進めていき、わが国にはほとんど紹介されていないこの思想家の多少とも紛然とした実像に迫りたい。

『哲学史』は一七三七年に初版が十二折版三巻として出版され、一七五六年に4巻目を増補して第二版が出版された。3巻までは、ギリシャ以前の哲学からギリシャ・ローマを経て中性末期に至るまでの哲学史が扱われる。4巻では、ルネサンス以降の哲学史がホップス、デカルトあたりまで扱われ未完に終っている。なお、4巻にはブルッカーの『批判的哲学史』の批判や「古代人の哲学の内容を暴くのにふさわしいいくつかの断想・金言」と

題された抜粋集を含む「前言」と「論考、古代哲学者が神性をどう考えたかを検討する」(以下、「論考」)とが巻頭に、「私の書齋」と題する詩集が本文の後、総索引の前に付けられている。初版の第1巻冒頭の題辭が削除された以外は、3巻までの本文に初版と増補版の相違はない。また、未完に終り草稿も見つかっていない残りの巻では、「1、各時代を支配した徳と悪徳、そこで生じた残酷、不正の詳細ならびに「……」、善政を敷いた公正な王の名前と僭主や他の悪政王の名前。2、人知の進歩、大哲学者や大立者のなした天才的努力、各国での主要宗教の創設ならびに「……」各国で生じた変動、最後に「……」様々な嗜好」(IV, iii-v 頁付は引用者)<sup>(2)</sup>といった人間心情史——人間精神史に対比される——が扱われる予定であった。しかし、一七五七年にデラランドが急死したことからの計画は実現されず、草稿は蔵書とともに遺族によってすべて焼却されたらしい。

さて、『哲学史』の認識対象は人間精神史である。デラランドは語る、

「その〔『哲学の〕歴史は、ある種の見方からすれ

ば、人間精神の歴史そのものと見なされ得るし、少なくとも人間精神がそこではできるだけ高い地点にまで上りきった歴史と見なされ得る。」(I, iv)

従来、ディオゲネス・ラエルティオスに発する、哲学者のエピソード・教訓集に自然観、道徳を織り込んだ哲学者列伝風哲学史が流布してきた。<sup>(13)</sup> また、キリストの啓示を基準とする護教論的哲学史も存在しており、スタンレーの『哲学史』などがその代表と言えよう。<sup>(14)</sup> それに對しデランドは、こうした過去の哲学史とは異なる新たな主題設定を行っているのである。哲学者の珍説・奇行の物語ではなく、人間精神史こそが問題である。また、キリストの啓示によって哲学史の時代区分を行っているとはいえ、実際の叙述では啓示の位置づけは肯定的なものとは言えず、むしろ、主題である人間の理性<sub>(15)</sub> 自然の光の展開の阻害要因と映るようになっていいる。デランドにとって問題なのは、啓示から自由な理性の自立的世界史的展開なのである。宗教批判に精出する同時代の地下文書の著者達と異なり、デランドは表立った啓示批判をけだし検閲上の顧慮から行っていないのであるが、啓示を

できるだけ骨抜きにし『哲学史』を人間精神史として叙述する点に、地下文書との連帯を読み取ることができる。したがって、『哲学史』全体を貫いて人間理性が展開していくわけであるが、その「理性」とは何であろうか。まず第一に、理性(の真理)と信仰(の真理)とは矛盾する。例えば、デランドはキケロに託して次のように語る。

「神々は存在するか否かと問われた時、集まった多数の人々を前にして公然と語る場合には、白状するが、存在することを否定するのは困難である。しかし、その問いが個人的に問題であったり、教育ある哲学者との関係で問題であったなら、それを否定することほどたやすいことはない。」(IV, 38)<sup>(16)</sup>

この矛盾は調停されるのであろうか。デランドの答えはもちろん否定的である。スコラ哲学主流派の調停の試みを批判して彼は書く、「人間には両者の結び付き——疑問に付すべきではない結び付きであるが——を知覚する能力は与えられていない。」(III, 272)。だから、この

矛盾は非和解的に存続する。

さて、ここに示されているのは、ラテン・アヴェロエ主義者や唯名論者などスコラ哲学の非主流的部分によって主張されてきた、理性と信仰との二重真理説である。しかしながら、こうした伝統的言説の背後で、それを利用しながら行われているのは、啓示宗教・信仰の実質的な排除である。そのことは、既に見たように、『哲学史』が人間精神史であり、啓示が骨抜きにされるばかりか理性の阻害要因とも見られている点から明かである。こうして、二律背反的に信仰と対峙し、事実上それを否定しざるものとして理性が存在することが、まず確認できるのである。

以上の点を前提にして、『哲学史』の理性の特徴として更に次の点が指摘できる。(1)合理論的性格。それは、認識を厳密に検討、批判しその真偽を区別する生得的な力(この理性は、デランドが近代哲学者ひいては全哲学者の中で最も高い評価を与えているデカルトの *cogito* と本性上連関している)ので、〈デカルト的理性〉と呼ぶことにする<sup>(17)</sup>。表象に対置されるより高次の理論的認識のレベル(伝統的呼称に従って〈ラチオ〉と呼ぶことに

するが、デランド自身がこの呼称を用いているわけではない)という、二重の意味で合理論的である。

初めに〈デカルト的理性〉から検討することにするが、それに先立ちデランドのデカルト哲学観を考察しておく。デランドはその成立の諸契機を次の5点に分類している。

- 1。「古代のくびきを抜け出る大胆さを有し、もっとも重圧的な偏見に昂然と刃向かい、眼を持つ人にそれを使って自然を注意深くみるように教える人が必要だったのだ。その人こそデカルトだった。」(IV, 181)
- 2。「考えることを学びつつ、人は明晰判明な観念しか用いないことを学び、今度はその観念が科学の進歩にかくも必要な検討と討論の精神を生み出した。」(ibidem)

3。「それ〔「自然」〕について近代哲学が語り、「古代哲学が語らなかつた」僅かなことは数学に基づき、デカルトはその数学を大いに研鑽した」(IV, 182)。

4。「かくも多くの近代的発明〔具体的には顕微鏡と望遠鏡〕」(ibidem)。

5. 「新しい哲学はそれら(『全學問』)を集め、互いに結び合わせ、助け合わせ、全体的一致によって真理がよく輝くようにした。ペーコン卿によれば、かくして、哲学者たるものは厳密で有用なすべての學問を自分の研究対象に含み、一種の百科全書を作り上げなければならぬ。虚栄心からではなく、自分を教育した後で他人を教育できるようにするために。」(IV, 183)

1と2とが〈ヘデカルト的理性〉に固有に関わるものであることは多言を要すまい。3と4では数学と自然研究上の諸器具の発明とが古代と近代とを分けるメルクマーとされている。5は百科全書という形で諸学の体系化、連鎖化とそれによる啓蒙とが扱われている。この百科全書への言及が、デイドロとダランベールが監修し、デランド自身も海軍関係の事物の注解を提供する形で参加した『百科全書』を意識してなされていることは疑いない。しかし、『哲学史』の叙述では、1、2に関わることは主題的に論じられるが、3、4、5で言及される認識の生産の近代的方法——自然科学的方法と百科全書的

体系化——についてはほとんど展開がない。例えば、ガリレオもケプラーも登場してこないというように。したがって、デカルト哲学成立の五契機の有する、近代哲学の総合的尺度としての性格にも関わらず、デランドの視線は常に1と2で示された批判検討識別の理性に集中しているとと言える。この理性は、同時に、「目を使って注意深く自然を見る」(IV, 181)ことに始まる非歴史的で普遍的な自然の光の働きの自覚化であり、先鋭化でもある。つまり、〈ヘデカルト的理性〉は近代以前にも素朴な形であれ存在していると考えられているのである。しかも、この理性は、デカルト主義の薫陶を受けた自由思想家『デランド自身の中に精神として骨肉化している』ので、『哲学史』を貫通する背骨となっていると云ってよい。そこで、次に、〈ヘデカルト的理性〉の特徴をよく示している代表的な一節を『哲学史』から抜き出すことにしよう、

「この(『自然の』)研究は徐々に真の學問へと進む(「……」)。真の學問とは、最良の文献を読み師を選びながら自らの精神を用いることに存する(「……」)。それは(「……」)文献の著者ではなく、自己と自己の獲得

しい光明によって判断すること、に存する。それは、事物毎の精神を掴み、それに本質的なものと人間が付与したものとを区別すること、に存する。結局それは、自己の判断を強化し、知識を広げ、人間、人間の臆見、時と場所、大多数という魅力的な権威、のどれにも欺かれない点に存する。」(IV, 5-6: 傍点引用者)

この様に、デランドにおいて理性は、デカルト同様、認識を批判し真偽を区別する主体的な力なのである。

次に、「ヘラチオ」だが、これは、表象 (sensus や *imaginatio*) に対置された理性である論理的体系的思考能力を指す。その説明に先立ち、先ず、表象とは何か、をわれわれなりにパラフレーズすることにしよう。それは、単に想像に留まらず、感覚、伝聞、比喻などを含む働きである。詳しい説明は省くが、F・ペーコンの四つの「イドラ」やデカルトの「蜜蜂」の例やスピノザの「*imaginatio*」二次認識などを、ここでは包括的に念頭に置いている。つまり、真理と臆見とをいかに区別するかというエピステモロジックな問いが伝統的に立てられており、合理的な傾向の哲学者は内部に多くの相違点を

含みつつも、虚偽・臆見の源泉を表象という感覚・想像作用に求めたのである。デランドもまたこうした伝統に忠実に自己の認識観を提示しているわけである。例えば、アラブのサブ主義——天体を神と人間との仲介と考えて崇拜する宗教——を批判してデランドは次のように語る。

「しかし、このサブ主義は少しづつ没落した。眼の知覚できないものが忘れ去られ、全尊敬が眼に見えるものに集中した。そこから天体に対する宗教的崇拜が生じ、誤謬相互の連鎖によって、占星術という空虚で馬鹿げた学問が生じたが、後者は「……」信じ易さと「……」人間の傲慢さという人間の好む二つの情念とをくすぐるのである。」(I, 122—123)

占星術という誤謬が、感覚・想像力・情念の協力で生じることをこの一文はよく示している。

そして、この表象に論理性・体系性としての「ヘラチオ」が対置される。それは、例えば、古代ギリシャ哲学の発展を寓話的感性的段階から体系的理性的段階へと抑えているところや、先に考察したデカルト哲学の成立契

機の3と5で数学と百科全書体系化を重視している点などに現れている。しかし、ヘラチオへの配慮は『哲学史』の展開中で全く軽微なものに留まっている。既に言及したように、デカルトの評価について見ると、解析幾何学や『精神指導の規則』の意義はほとんど顧みられず、普遍的判断力としての理性の自覚 (cogit.) のみが重視されるといふぐあいである。同様に、数学や伝統的論理学の発展も哲学史上に占める位置がない。<sup>(20)</sup>

その点で対照的なのが、『百科全書序論』のダランベールである。彼は解析的方法の発見とその応用による諸学の体系化を哲学の発展方向と考えている。ダランベールにとっては、デランドの説く〈デカルト的理性〉は「スコラ学や臆見や權威のくびき」<sup>(21)</sup>を打ち破るイデオロギー的整地作業のために不可欠な悪であり、破壊的批判的役割を担うものに過ぎない。「馬鹿げた臆見が宿年の根強いものである時、人類を覚醒させるにはそれより良い方法がない場合、その臆見を別の臆見によって置き換えざるを得ないこともある」<sup>(22)</sup>それに対し、デカルトの解析幾何学に代表される方法的理性 (ヘラチオ) に関わる)こそダランベールにとって真にポジティブな理性であり、

ニュートン、ロックを通じて「哲学の世紀」である十八世紀に直結するものなのである。

「人はデカルトを幾何学者あるいは哲学者と見ることができる。彼がほとんど重視しなかったと思われる数学が、にもかかわらず、今日では彼の学問のもっとも堅固で最も異論の少ない部分をなしている。〔……〕しかし、この偉人の名をとりわけ不滅にしたのは、代数を幾何に応用することができた点である。それは、人間精神がそれまで抱いたこともないほど広大な着想であり、またうまくいった着想であったが、これからも、単に幾何学に留まらず、あらゆる物理数学的科學における最も深い研究の鍵となるだろう。」<sup>(23)</sup>(傍点引用者)

さて、デランドとダランベールとの鮮やかな対照は、単に両者間のものであるに留まらず、十八世紀前半から後半への転換の一端を、デカルト、近代、理性をめぐって鋭く垣間見せているが、この問題の詳細な検討は稿を改めて行うこととして、ここでは両者のコントラストを

示すことで満足したい。

さて、デランドには以上のような合理的理性の他に、(2)〈実験科学的理性〉がある。この理性の働きは『自然学自然誌論集』で次のように見事に規定されている。

「どんな体系にも邪魔されずに実験哲学を養成すること、非常に明白で非常に確実な事実を集めること、多数の実験を行うこと、あらゆる可能な方法で実験を交雑させること、最後に、洞察力にこの上なく優れた天才が今後発見することの他に未発見のものが常に残ることを、確信し続けること。」<sup>(23)</sup>

ここには実験科学の方法が、デイドロの『自然の解釈断想』を思わせる筆致で描写されている。最後の命題からデランドは、歴史的事実としての科学の進歩と将来における無限進歩とを展望してもいる。理性の活動はここでは、体系に捕らわれないこと、確実な事実の収集、工夫された実験といった具体的な手段の結合として現れる。この様な理性の活動は歴史的に交革されるものであり、また、教育も可能である。そしてその成果自体も歴史的・

相対的である。但し、その歴史性・相対性は絶えざる進歩の途上におけるものであるが。さて、この理性は『哲学史』の中でも、科学技術上の発見・発明を論ずる際に登場してくる<sup>(23)</sup>。しかし、それはまだ断片的挿話的なものに過ぎず、『哲学史』を一つの「人間精神進歩史」に変えることからは程遠いのである。だが、『自然学自然誌論集』の存在を考慮する時、デランド哲学中に占める〈実験科学的理性〉の位置はかなり高いと言えよう。

ここで、『哲学史』の理性観の全体像の考察へ進むことにする。先にみたように、理性は信仰と対置され、『哲学史』の展開の理論的対象となるものである。しかも、理性の見いだす真理は啓示のように絶対的なものではなく、歴史の中で徐々に発見されてくる。そして、近代では理性は一つの自覚的方法として働いた。順不同で言えば、数学的处理、演繹・帰納、分析・総合、実験・観察といった方法が挙げられる。近代科学と呼ばれる理論実践の体系の中で、これらの方法は分野毎に重心を移動させながら行使された。デランドはこうした点を認識し学問の進歩を展望している。しかし、他方で、理性は〈デカルト的理性〉として絶対的に働く。それは中世の

闇を引き裂き、学知の究極的根拠を与えようとする。所与のものが総て一旦否定し尽くされた後、*ogitio ergo sum* という究極知の発見によってそれ以前にはなかったエピステモロジックな位置づけを得る。つまり、「明晰判明」を基準にして真か偽かに二分されるのである。同時に、歴史の連続性も切断され、絶対的に二分される——暗黒の中世対光明の近代。

さて、「ヘラチオ」と「実験科学的理性」とは、認識の生産に際し理論的契機と経験的契機として区別されながらも、互いに協力し合う関係を樹立しうる。それに対して、「デカルト的理性」は、同一の論理的平面上に置かれた場合、これらと矛盾対立し合うような性格を有している。というのも、先の二理性が後天的で相対的な能力であり真理を歴史的に徐々に発見し蓄積し結合していくのに対し、「デカルト的理性」はいつでもどこでも明晰判明に働きうる生得的な能力だからである。ガイスラーとマカリはともにデランドに前者、とりわけ、「実験科学的理性」を見て彼をフィロゾフに引き付けて解釈しているが、<sup>(26)</sup>少なくとも『哲学史』では後者が主調を奏している。

したがって、『哲学史』においては、批判検討の精神である「デカルト的理性」が支配的な位置を占め、デカルトではこの理性と結合していた「ヘラチオ」——「幾何学的精神」と呼ばれたもの——は後景に退いて、そのかわりに、「実験科学的理性」が「デカルト的理性」に伍す、というよりも、付き随う関係が成立していると言える。その背景には、同じデカルトに依拠する理性でありながら、「デカルト的理性」が「攻撃的理性」となって聖書批判、宗教批判に大挙して向かうのに対し、「幾何学的精神」の方は自然科学、経済学、法学では力を発揮しながらも批評の分野では重要ではないこと、また、科学内部でも公理的演繹的方法に替わって仮説実験、解析的方法が優位に立っていく時代状況があったと思われる。いずれにせよ、同一レベルに置かれれば矛盾し合うような二種の理性——換言すれば、デカルトの *ogitio* (解析幾何学でなく) とニュートンやロックの名と結びついた実験科学——が前者のヘゲモニーにおいてデランドでは糾合されているのである。力学の分野ではデカルトに対するニュートンの優位を先駆的に主張したデランドも、哲学においては「デカルト的理性」を頑なに守っ

ている。ここにこそ、批判検討の精神と科学的方法とを方法的反省を通じて方法の側から結合する方向を取った後のフィロゾフとデランドとの決定的種差があると思われる。換言すれば、デランドが〈デカルトの理性〉に固執しそれを中心に〈ラチオ〉と〈実験科学的理性〉を併置するに留まるのに対し、フィロゾフは、批判的態度・姿勢を十八世紀に主流をなすに至った科学的方法——解析、実験など——と結合し直すことによって、知的〈態度〉と科学内在的〈方法〉とを〈真知の生産〉という実践的観点から統一する方向に進むのである<sup>(27)</sup>。

それゆえ、われわれは、デランドが完全に匿名で一七四一年に初版を出版した「唯物論的」恋愛物語、『ビッグマリオン』を典拠に、デランドを感覚論的唯物論者と規定するガイスラーやマカリの見解には同意できない<sup>(28)</sup>。ガイスラーは語る、「注目すべきは、ブロー||デランドが外部感官を認識の唯一の源泉と捉え、反省概念を観念を結合する操作という意味でのみ使っていることである、コンディヤックが十三年後に『感覚論』で定義したように<sup>(29)</sup>」この様にガイスラーにとってデランドは既にコンディヤックの域に達している。マカリもデランドをコン

ディヤックに引き付けて解釈しているが、『ビッグマリオン』における「反省」を単なる操作に過ぎないとまでは言わず、それを理性の自立的な働きだと考えている<sup>(30)</sup>。われわれの見解では、『ビッグマリオン』でもデランドの「反省」には〈デカルト的理性〉が貫かれているが、『哲学史』ではまだ低かった〈実験科学的理性〉の位置が高められ、その結果、彼の認識観内部で両理性が拮抗し合い矛盾し合うようになったと思われる。『ビッグマリオン』の「反省」に理性の自立性を見る点でわれわれはマカリと見解を同じくするが、彼がこの著作を「唯物論的」と見る点には同意できない。「唯物論性」をめぐる問題は本稿の主題ではないのでマカリ説の検討はここでは行わず、以下では、ガイスラー説を批判的に検討しつつ『ビッグマリオン』の理性観を概観することにした。ガイスラーが論拠とする『ビッグマリオン』の一節は以下のようであり、それは「いかにして子供達は知識と観念を得たか、彫像だったのが、どうして理知的になるのか<sup>(31)</sup>」という問いに対する回答になっている。

「初めに、子供達は感官からこれらの観念や知識を

得る、つまり、彼らは見、聞き、触れ、感じるのである。次に、感官が子供達に表示し指示するだけのものを他の人々が彼らに教える。最後に、子供達は眼にしたものと人が教えてくれたものとを自分で結合する。

これが反省の成果である。こうして観念が形成され知識が獲得される。<sup>(32)</sup>

さて、以上からデランドの反省を「観念を結合する操作」とのみ取ってよいのだろうか。反省が単なる操作なのか、理性の自立的働きなのかは、経験論と合理論とを分ける大問題である。確かに反省は観念を結合するという側面で捉えられているが、それが「操作」となるには、自立性を喪失して観念を結合する機能に還元され尽くす必要がある。コンディヤックの感覺論はその課題を果たし、反省諸機能を發生論的に位置づけて感覺に還元してしまう。それに対し、先の引用に登場する反省はむしろ感覺から自立した（「自分で結合する」）トータルな認識能力と見るのが、自然である。確かにデランドは、「思考が姿を現す<sup>(33)</sup>」ためには彫像が運動することが必要だと考えており、である以上、思考は生得的なものでは

なく運動からも自立していない。しかし、デランドは思考や言語能力がいかんして獲得されるに至るかを發生論的に論ずるところまでは進まない。思考は「まるで闇夜に走る一条の光のように」姿を現すとされるのである。<sup>(34)</sup>

この考えがコンディヤックの感覺論と相容れないことは説明を要すまい。思考諸機能が感覺作用から徐々に連続的に成立することは少しも語られないのである。しかも、他面では、思考は相変わらず実体化されている、「おまえは私に固有のもの、おまえは私の存在のしるし<sup>(35)</sup>」。この思惟の実体化の陰に「デカルト的理性」の存在を読み取るのは当然と言えよう。『ピグマリオン』に感覺論的傾向はもちろん存在するが、それが反省の操作化にまで貫かれているとするガイスラーの主張には無理がある。合理論と感覺論、「デカルト的理性」と「実験科学的理性」との矛盾、並存をこそそこに見るべきと言えよう。

それでは、『哲学史』に戻りつつデランドの理性に絡めくくりを付けていこう。今見てきたように、それを十八世紀後半の啓蒙の理性に直結させて先駆者に仕立て上

けるのには無理がある。啓蒙の理性が世紀の前半と後半でこれまで見てきたような相違を有するとすれば、デラントの理性が基本的に前半期の理性の特徴を持つことは否めない。〈デカルト的理性〉は前半期の理性の1と重なるものであり、〈実験科学的理性〉は後者の3とほぼ等しい。〈ヒュ머니スト的理性〉については本論では言及されなかったが、『批判的哲学史』という標題が示すようにデラントは歴史批評の系譜と関わっている。ブルーストも言っていたように、「人間精神と啓蒙の批判的歴史」の流れの中にデラントは植さしているのである。

しかし、同時に、彼の理性は十八世紀後半の啓蒙思想に既に踵を接している。というのも、歴史批評との連関で言えば、デラントは成果として考証学的博識を利用したが、彼自身は考証学者とは言えない。実際、文献や史実の批評の類は、『哲学史』の中に存在しない。彼の主眼は、批評や博識にはなく、啓示から自由に人間精神史を叙述し、汎神論や無神論を説き、哲学者の社会的役割を喧伝することにある。したがって、『批判的哲学史』が「批判的」であるのは、批評の方法に従って書かれたからというよりも、「批判的精神」によって書かれたか

らなのである。その意味で、デラントは既に、考証学の蓄積が哲学的批判に専ら利用される時代の空気を吸っているのである。<sup>(36)</sup> また、〈ヘラチオ〉の影が薄く〈実験科学的理性〉の方が重視されていることからわかるように、デラントの眼は論理学・方法論のレベルで実験科学や経験論の方を向いており、その意味でも、「体系の精神」を批判し、ロックの経験論を積極的に受容したフィロゾーフと接しているのである。

しかし、両者を等置するわけにはいかない。その間には、ガイスラーやマカリが見なかった種差が存するからである。理性論的には、〈デカルト的理性〉が支配的地位を占め自立性を保っていて、科学的方法や経験的現実と十分結合しない点に問題があることは、既に見た通りである。この結合がその後如何になされたか、その際に如何なる歴史的条件が求められたか……こうした問題に一般的に答える用意はないが、ここで、われわれが、デラント個人に関わって結合を阻害した要因について言えることは、第一に、彼の中に民衆蔑視の考えと、それと結び付いた哲学者の孤高性の考えがあることである。デラントにとって民衆はまだ迷信や臆見に捕らわれている

ので、真理は彼らにはまふし過ぎオブラートに包んで傳達されなければならない。哲学者同士でなら秘教的な形で露な真理も傳達し得る<sup>37)</sup>。この考えは、反宗教的思想が十八世紀前半において俗世間と隔絶した状態で自由思想家同士の間でのみ論じられ、手稿の形で地下文書として伝播されていた状況に、びったりと対応している。したがって、孤高性、民衆蔑視は状況の変化によってしか乗り越えられないだろう。第二に、〈経験的なもの〉の評価をめぐる動揺が挙げられる。それは一方では、「サブ主義」について見たように、表象として迷信や誤謬などの温床となると見なされ、他方では、『自然学自然誌論集』での実験の高い評価に見られたように、科学の不可欠な構成要素と考えられている。そして、〈実験科学的理性〉の位置は年とともに次第に高まっていった。しかし、科学の方法によって〈デカルト的理性〉を換骨奪胎するまでには至らなかつた。〈経験的なもの〉を出発点にして科学の発達、諸科学の分類・体系化を一貫して試みた『百科全書序論』のダランベールとは異なり、デランドの『哲学史』は人間精神史を標榜しながらも科学の位置も科学史の叙述も取るに足りないものに留まっており、

〈経験的なもの〉がそこで重要な役割を演じる余地がないことは既に見た通りである。

結局、民衆にせよ、実験科学にせよ、総じて〈経験的なもの〉がデランドには頼りないものとしか映らなかつたし、それがまた当時の時代状況ともなっていた。そんな段階では〈経験的なもの〉との結合（それは同時に当時の経験的現実である宗教の支配との妥協ともなる）ではなく、逆に、デカルトが方法的懐疑によって示したように、そこから身を引き剥すことが批判には求められる。それを果たす理念こそ〈デカルト的理性〉だったのである。なぜなら、方法や経験とは別に自立的絶対的に機能する点にこの理性の本領も弱点もあるからである。

デランドについてわれわれが結論すべきことは、世紀後半に対する先駆者性ではない。今述べたような不可避免的な時代的制約にも関わらず、〈デカルト的理性〉によって信仰・伝統・權威の力に立ち向かうとともに、それとの矛盾を押してまでも実験科学や経験論を積極的に受容して、十八世紀前半の局面の実践的要請を満たしたところである。前半期の理性でありながら後半期に接続せんとするデランドの理性は確かに内に矛盾を含むが、その

矛盾こそデランドが時代と格闘し未来を切り開こうとしたことの証なのである。

(1) 姓をブローレデランドとすべきか、デランドとすべきかについては、後に触れる二人の代表的研究者ガイスターとマカリの間で一致が得られていないようである (voir, Geisler, 1982, p. 233, note 2)。われわれはこの論争に加わることなく、伝統的呼称となっているブローレデランドを標題では用いることにし、本文中では便宜上デランドと呼び慣らすことにする。なお、Geisler (Roll), *Bourne-Daslandes. Ein Materialist der Frühjahrsführung*, Berlin, Rütten und Loening, 1967; "Bourne-Daslandes lecteur de manuscrits clandestins", DS: *Le matérialisme du XVIIIe siècle*, éd. par O. Bloch, Paris, J. Vrin, 1982; の両者をそれぞれ Geisler, 1967; Geisler, 1982 と表記する。

(2) なお、本稿は博士課程単位修得論文として一橋大学社会科学研究科に一九八六年一月に提出した拙稿『フランス十八世紀中葉の哲学史の歴史』四百字詰原稿用紙三六三頁、(一橋大学図書館蔵)を元にしてゐる。そこでは本稿で扱うデランドに止まらず、タランヌール J. H. S. Formay の三種の哲学史について、それを支える世界観、哲学史の方法論、時代意識が分析されている。デランドの世界観や『哲学史』の内容の詳細についてはそちらを参照のこと。また、一九八六年六月一日に日本フランス語フランス文学

会春期大会でデランド『哲学史』に関する研究発表を行い、その要旨「ブローレデランド『批判的哲学史』その世界観と方法論をめぐって」が『フランス語フランス文学研究』第四九号、一九八六年一〇月、九八—九九頁、に掲載されている。この要旨は本稿の要旨ともなりうるものなので併せて参照のこと。

(3) カント『啓蒙とは何か』篠田英雄訳、岩波文庫、七頁。

(4) 十八世紀前半の啓蒙を考えるに当たって忘れてはならないのが、手稿の形で知識人の間に広まっていた様々な反宗教的地下文書である。ウエイドの研究 (Wade (Ira O.), *The clandestine organization and diffusion of philosophic ideas in France from 1700 to 1750*, Princeton, 1938) 以来、スミンツの研究 (Spink (John Stevenson), *French Free Thought from Gassendi to Voltaire*, Londres, 1960) ブロック指導の集団研究 (*Le matérialisme du XVIIIe siècle et la littérature clandestine*, sous la direction d'Olivier Bloch, Paris, Vrin, 1982) などが発表され、校訂本もいくつか出版され始めている。これらの地下文書が後半期に甚大な影響を与え、ウエイドなどは「一七〇〇年から一七五〇年にかけての地下論考による哲学的思想の漸次的組織化と伝播は自由主義の堅固な土台を置いたので、一七五〇—一七八九年の作家達はその土台の上にひたすら建設することが問題だった」(Wade, *op. cit.*, p. 275) と言うは

のである。ガイスラーはデラランド『哲学史』への地下文書の影響を調べようとし、結局、実証的には何ら成果を上げることができなかったが、デラランドと地下文書との「着想の共通性」(Geissler, 1982, p. 230)をうまく指摘している。こうした点からも、デラランドを含む十八世紀前半の理性を規定するために地下文書の考察は不可欠であるが、本稿では十分にそれを行えなかったことを言明しておく。ただし、デュラックも語るように、「地下文学は、それだけ取り上げるなら、一七五〇年以前の啓蒙が何だったに比べて不正確なイメージを与えてしまう」ほど「極端な大胆さと時に野蛮なほどの活力」(Dulac (Georges), "Les manuscrits clandestins et le mouvement philosophique jusqu'en 1750", DS: *Histoire littéraire de la France III. De 1715 à 1789*, Paris, Editions sociales, 1975, p. 174)を有しているのだから、その取り扱ひには慎重をなげなければならないところとである。したがって、十八世紀前半の啓蒙を考えるに当たってホルネやアザールにそのまま依拠するのは、現在では不十分であるとはいえ、必ずしも失当であるとは思われない。

- (5) D・メルネ『フランス革命の知的起源』坂田太郎、山田九朗監訳、上、十九頁、勁草書房、一九六九年。
- (6) P・アザール『ヨーロッパ精神の危機』野沢協訳、法政大学出版局、一九七八年、一五〇頁。
- (7) この理性については、野沢協訳『メルキセデックの

横死——『歴史批評辞典』の歴史批評』(ビエール・ペール著作集)第三巻、『歴史批評辞典』I、野沢協訳、法政大学出版局、一九八二年、所収、一一一—一三二頁)の第二章『批評の時代』の種々相」と、J・ブルースト『百科全書』平岡昇、市川慎一訳、岩波書店、一九七九年第一章『百科全書の精神の起源』を参照。また、周知のように、ラテン語や修辭学の修得を主とし、bel espritとエニシト的教養の育成を目的とする人文教育 *cours des humanités* の理念と制度は、フィロソフ達の批判にも関わらず、ロージシュを中心に十八世紀後半まで存続し、反発を買うとともに少なからぬ影響を与え続けた。

- (8) マザール、前掲書、三一〇頁。
- (9) マーネット、前掲書、四四頁。
- (10) Macary (Jean), *Masque et Lumières au XVIIIe. André-François Deslandes "citoyen et philosophe", 1689—1757*, La Haye, Martinus Nijhoff, 1975, XIV—260 p.
- (11) ガイスラーとマカリの両説については前掲の拙稿「フランス十八世紀中葉の哲学史の歴史」第一章一節で詳細に分析している。
- (12) Boureau-Deslandes (André-François), *Histoire critique de la philosophie*, Amsterdam, F. Changuion, 1756, 4 vol., in-12 からの引用については、この様に本文中に( )に於いて引用の巻数、頁数の順に示すことにする。
- (13) 例えば Fenelon, *Abbrégé des vies des philosophes*,

Paris, J. Estienne, 1726, in-12, 495 p. がそうであり、  
ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシャ哲学者列伝』の  
仏訳も一六〇二、一六六八年に出版され、デランド『哲学  
史』以後もオランダで新訳 (Diogène Laërce, *Les vies des  
plus illustres philosophes de l'antiquité* [……], Amster-  
dam, J. H. Schneider, 1758, 3 vol. in-12) が出版され  
た。

(14) Stanley (Thomas), *Historia philosophiae vitae, opi-  
niones* [……], Venetis, 1731, apud Sebastiani Coleti, in-  
4°, 3 vol. (英語版は一六六五年)

(15) デランドが哲学史の第二期であるギリシャ・ローマ時  
代と第三期であるキリスト教時代とをキリストの啓示によ  
って区分し、表面上啓示を重視して見るように見える点につ  
いて、ブルーストは次のような評価を下している。デラン  
ドは「比較に基づく歴史的な客観的方法」(Proust (Jac-  
ques), *Dictionnaire de l'Encyclopédie*, Paris, A. Colin, 1962, p.  
241) を提示し得たにも関わらず、啓示に特権的位置を与  
えてきた「護教論的伝統」(*Ibid.*, p. 242) に追隨して啓示  
を時代区分の柱としてしまった(このことをブルーストは  
暗示的に語る)。しかし、啓示による時代区分をすぐに護  
教論に追隨したものと見るには多少無理があると思われる。  
表面上伝統に従うことで逆にキリスト教に手酷いしっ  
ぺ返しをすることもあるからである。デランドの啓示によ  
る時代区分もそうした性格を持つことは、次の三点につい

て指摘できる。第一に、啓示以前の哲学の主要部分を占め  
る異教性、無神論性を、啓示以前を理由に免罪し、おっ  
びらに紹介喧伝し得る点(II, 397 以下、参照)。第二に、  
啓示を時代区分の柱として重視すればするほど、逆に、人  
間精神史としての哲学史の流れと齟齬を来し、啓示の時代  
区分としての不自然さを印象づける点。第三に、啓示から  
ルネサンス以前までを第三期とし、その後には理性の復活、  
全面開花の時代である第四期を置くことによって、啓示こ  
そが中世の暗黒をもたらしたと暗示される点。しかし、同  
時に、この時代区分がローマ時代の哲学史の連続性を外的  
に断ち切ってしまう否定的な役割も果たすことは、否めな  
い。したがって、現段階ではこの問題に断定的な答えを与  
えることは控えるべきであろう。

(16) 同じ趣旨のことが諸処で言われているが、例えば、ホ  
ンシュッツィに託して語られている箇所 (IV, 102) を  
参照。

(17) デランドとデカルト主義との関係については次の註を  
参照してもらいことにして、ここでは、〈デカルト的〉とい  
う形容詞をわれわれが〈批判的〉とはほぼ同じ意味に用いた  
ことについて、その理由を説明しておきたい。野沢氏もベ  
ールについて語るように(前掲「解説」、一二九六頁以下)、  
〈デカルト的〉という言葉は、思想的に見て、〈批判的〉  
という言葉と同義的に使われていたと思われる、方法的懐疑  
を通じて明晰判明に認識されるものしか認めまいとするよ

うな一つの態度を形容する。デランドもまた、本文で以下見るように、デカルト哲学を諸契機に理念化し、〈批判的〉態度に一本化しさえするほどであり、テキストに即した分析は何ら行っていない。この様に、デランド自身が既に、デカルトを批判検討識別の態度の象徴、遠い準拠として扱っているに過ぎず、けっして忠実に踏襲してはいない。したがって、〈デカルト的〉∥〈批判的〉としてデランドの〈デカルト的理性〉を問題にするのは、思想的にも『哲学史』のデカルト観からも首肯され得るものと言えよう。

(18) 事実、デランドはマルブランシュと面識がありその薫陶を受けている。「私の書齋」中において彼は「マルブランシュよ、すべて貴方のおかげだ／御手が取り払われると／偏見は隠される／誤謬はさげすまれ／もはや我らに幻想を抱かせること無し」と言い、マルブランシュがオラトリオ会に引き留めようと尽力してくれたのに、諸般の事情でそうできなかった若き日のことを晩年になって悔いている(IV, 192)。

しかし、デランドがマルブランシュを含むデカルト派から受けた影響の詳細については何もわかっていない、ガイスラーは「私の書齋」の先の一節を典拠に「彼」∥マルブランシュを通じて「……」、ブロー∥デランドが哲学研究の手ほどきを受けデカルトを知ることになったことは明かである」(Geisler, 1967, p. 10)とし、更に「デランドの初期作品『冗談を言って死んでいった偉人の考察』の自由思

想等に依拠して、「ブロー∥デランドはかなり早くからマルブランシュに対して距離を取ることになっており、デカルト派の形而上学とキリスト教の見方に基づく師の機会原因論の哲学と、師の合理主義的思考法とを区別したいと願った」(ibid., p. 11)とする。マカリは、マルブランシュの『真理の探求』が信心深い人々を不安にさせたことを述べた後で、『偉人の考察』の別の一節を典拠に、「デランドがマルブランシュから『追求の理念』(Maury, o. c., p. 13)「自由な探求心」(p. 14)を学んだとしている。この様に、われわれはデランドがマルブランシュから批判検討の精神を得たことを推測できる。しかし、既に述べたように、この精神は当時の進歩的思想家の時代精神ともなっていたのであり、また、ガイスラーも認めるように「ブロー∥デランドは現存する同時代人との交友関係についてはほとんど言明しなかったの」(Geisler, o. c., p. 11)これをマルブランシュの感化によるものと断定することはできない。ガイスラーはまた、『偉人の考察』の英訳の注解(著者の特別の友人」(voir, ibidem))によってデランドがフォンネルとも親交があったとしていたが、両者の交友についてもこれ以上のごとはわかっていない。

(19) この発展段階の捉え方自体は、ガイスラーも語るように(ibid., p. 162, note 12)「フォンネル以来普及していたものである。ちなみにデランドは、哲学史の第二期を六時期に区分し、その最初の四期を1。寓話哲学とギリシャ

の七賢人、2。タレスとピュタゴラス、3。ソクラテスとその弟子達、4。エレア派、ヘラクレイトス、ピュロン、デモクリトス、エピクロスなどに分類して、そこに体系化の進展を見ている。

(20) 野沢氏によれば(前掲「解説」、同所)、「ペールもデカルト『方法序説』の四つの規則内の第一規則(「明晰判明に私の精神に現れるもの以外は一切、自分の判断に含めないこと」)のみを重視し、分析、総合、枚举に關わる他の三規則は無視しているとのことである。こうしたことから、歴史批評や宗教批判の領域では、「ヘラチオ」に關わるデカルトの方法は捨てられ、「ヘデカルト的理性」だけが態度として保持されたと見ることもできるかもしれないが、この点についての検討は後日を期すことにしよう。なお、註(17)も参照のこと。

(21) Alembert (Jean Le Rond d'), *Discours préliminaire de l'Encyclopédie*, DS: *Œuvres*, Paris, Eugène Didier, 1853, p. 142.

(22) Ibidem.

(23) *Ibid.*, p. 140.

(24) Boureau-Deslandes, *Recueil de différents traités de physique et d'Histoire naturelle*, seconde édition, Paris, 1748, p. 269 (Macary, *o. c.*, p. 123).

(25) 過去の遺産に新たなものが無名の人々によって付け加えられつつ、発明が徐々になされることを説明して、デラ

ンドは次のように語る、「技芸や学問の諸原理が発見されたのはひとえに次々と付加されていく思考、見解、試験の長い連鎖によるのであり、無数の啓蒙された人々が絶え間なくこれに従事しなければならなかった」(I, 219—220)。

(26) 例えば、ガイスターは、同時代の哲學家ブルッカーを合理論、古代に対する事大主義、遅れたドイツ啓蒙に分類し、デランドを経験論、進歩史観、進んだフランス啓蒙に分類して、両者を対置している(voir, Geissler, 1967, p. 56—59)。一方、マカリはデランドに「経済政治活動に従事する上昇期ブルジョワの経験論的進歩主義的思想と、自由思想との合流を見ている(voir, Macary, *o. c.*, p. 19)。(27) 例えば、コンディヤックは「体系の精神」を批判して観念の分析総合の内に正しい方法を見いだし、本文でも触れたように、タランペールは解析的方法による諸学の体系化を哲学の課題とし、デイドロは仮説実験や対話に正しい理性のあり方を求めよう。

(28) Boureau-Deslandes (A.-F.), *Pignation ou la statue animée*, Londres, Samuel Harding, 1742, XVI—125 p. suivi par *L'optique des mœurs, opposée à l'optique des couleurs* (p. 126—205), par Geissler, 1967, p. 117—146. には、一七四一年の初版に基づく『ピグマリオン』の校訂版とドイツ語訳とが付録として収録されている。この小冊子の主題は、主人公ピグマリオンの作った彫像がいかにして生命、感性、理性を得たかを、唯物論的というより

は物活論的色彩で纏うことにある。

- (29) Geissler, 1967, p. 89.
- (30) Voir, Macary, o. c., p. 228.
- (31) Bourreau-Deslandes, *Pigmation*, p. 71.
- (32) *Ibid.*, p. 73-74.
- (33) *Ibid.*, p. 58.
- (34) *Ibidem.*
- (35) *Ibid.*, p. 59.
- (36) それがよくわかるのは、デランドが『哲学史』の第4巻「前言」で行っているブルッカー『批判的哲学史』に対する批判である。彼はこの哲学史を資料の「未消化なままの編纂物」(IV, v)と酷評し、古代民族の狂気や不条理やカバラ哲学などについて詳論して何になるのかと、弁じて

いる。考証学者ブルッカーのように「豪勢な考証学的博識」を示して「古代の哲学者の文章や気の利いた言葉、著作の標題、彼らの生きたオリンピア紀のことを報告するよりも、古代の哲学者の天才や性格を知らせたい」と考え」(VI, vii)、「その観点から考証学の簡潔な利用を目指すのが、「哲学者」デランドの立場なのである。

(37) 『哲学史』第4巻の冒頭の「論考」で、民衆には「神秘の覆い」が必要なことを語った後、デランドは付け加える、「もし賢者の一人が人類への同情につき動かされて僅かでも真理を暴こうものなら、感謝されるどころか、ほとんど誰からも反感を買った。」(IV, 10)

(一橋大学助手)